

中学・高校生の登校回避感情と登校・不登校理由から 考察する不登校傾向とその支援

—大学生を対象とする回顧法質問紙調査から—

教育学専攻教育臨床心理学コース 3615005 松本 直子

第1章 文献研究

不登校予備群に関して、五十嵐・萩原（2002, 2004）は、その状態像を測定する視点から別室希望、遊び・非行、精神・身体症状、在宅希望の4下位尺度からなる「不登校傾向尺度」を開発し、児童生徒の不登校の心理傾向を捉えようとした。しかし、作成後年数が経っていることや場面の多様性に欠けることから尺度改訂の必要があると論じた。

第2章 実証研究1：「不登校傾向尺度」の再検討

五十嵐ら（2004）の不登校傾向尺度に対して、松本・片山・北川（2015）はその改訂版作成を行った。五十嵐ら（2004）のものに松本（2014）独自の尺度項目を加えた質問紙調査を中学生を対象に行ったが、五十嵐ら（2004）の因子構造が再確認され、場面の多様性を想定した項目を追加した意味も認められた。

第3章 実証研究2：登校回避感情と登校・不登校理由から考察する不登校傾向

実証研究1で作成した尺度項目を用いて回顧法（中学時代と高校時代）による質問紙調査を大学生に行った。不登校傾向（4尺度）と登校回避感情・不登校理由・登校理由の関係をみると、①登校回避感情と不登校傾向（特に精神・身体症状と別室希望）は高い正の相関があり、②不登校理由の2尺度（友人起因と教師起因）と不登校傾向（特に精神・身体症状と別室希望）は高い相関があった。③登校理由に関しては、不登校傾向（特に精神・身体症状、別室希望、在宅希望）と学校魅力とは負の強い相関があり、親の圧力とは正の相関があった。④不登校傾向や登校回避感情に関して、中学時代群は高校時代群よりもやや高い傾向があった。⑤不登校理由の教師起因と不登校傾向の相関は、中学時代群の方が高かった。⑥登校理由に関しては、中学時代群の学校魅力は不登校傾向と高い負の相関があり、高校時代群の親の圧力は不登校傾向と高い正の相関があることが特徴であった。

第4章 総合的考察とまとめ

実証研究2の結果を中心に本研究の意義と支援への示唆を考察した。不登校傾向尺度のうち、精神・身体症状と別室希望が登校回避感情や不登校理由との関係が特に強いことから、それら2尺度が不登校の兆候を表す有力な指標となりうることが示唆された。不登校傾向の別室希望が学校魅力と負の関係、教師起因と正の関係にあることから、学校行事やクラブ活動の充実や信頼できる教員の存在など、楽しく安心して過ごせる居場所の確保の取り組みが求められている。不登校傾向尺度には、①不登校傾向の把握で不登校予備群の発見につながる、②不登校傾向尺度によって不登校傾向のパターンがわかるので、不登校傾向の児童・生徒に適した個別支援のヒントが得られる、③集団全体の不登校傾向の兆候をとらえるスクリーニングテストとして利用できる、などの利用法が考えられる。